

生物多様性と世界を動かす GX

～第3回エコ・カレッジ、2025年度 環境・温暖化対策事例発表会～

9月26日、ホテルレイクビュー水戸にて、「第3回エコ・カレッジ」、「2025年度 環境・温暖化対策事例発表会」及び「第2回推進員研修会」を同時開催いたしました。

今年度は統一テーマを「生物多様性と世界を動かすGX（グリーン・トランスフォーメーション）」として、地球規模で進行する環境課題に対しての最新の研究成果や技術的アプローチを紹介。産官学の垣根を越えた活発な議論が展開されました。

PART1 「生物多様性」

「地球レベル・地域レベルの生物多様性異変と生態リスク」

国立環境研究所 生物多様性領域 生態リスク評価・対策研究室 室長 五箇公一 氏

講演では、地球温暖化や人間活動による生物多様性の急激な変化と、それに伴う生態リスクの高まりが示されました。外来種の侵入や気候変動により地域固有の生態系が脅かされ、農業や暮らしに深刻な影響が及んでいる現状を指摘。地球規模と地域規模の両面からの保全対策と、地域社会との連携による取り組みの重要性を強調されました。



PART2 「世界を動かすGX」

「地球の気候と環境の非常事態に直面して社会の大転換が始まっている」

東京大学名誉教授 山本良一 氏

地球は今、気候と環境の非常事態に直面し、社会の大転換が求められています。温室効果ガスの急増や海面上昇、気候転換点の突破など、科学的根拠に基づく危機の実態を示されました。このままでは1.5℃目標の達成は困難であり、今後5年で排出量を半減する必要があると強調し、私たち一人ひとりの行動が、地球の未来を左右する鍵になると熱く語られました。



「世界が驚愕 ペロブスカイト太陽電池の発明者」

桐蔭横浜大学 特任教授 宮坂 力 氏

ペロブスカイト太陽電池の発明者として、これまで進めてきた発電効率の向上、低コストへの挑戦、溶液法による薄膜形成や界面パッシベーション技術を解説されました。

そして、軽量で曲げられる薄型基板モジュール(ペロブスカイト)の開発と社会実装の現状を紹介し、耐久性向上や大面積化、部材コスト低減など産業化課題にも言及されました。国内企業連携による国産モジュール実用化への期待が込められていました。



「環境に優しいリサイクルエネルギーソリューション」

現代ジャパン株式会社 代表取締役社長 沈 洪受 氏

廃プラスチックを高品質な燃料油へ再生する革新的な熱分解技術を開発し、日本市場への展開を進めています。独自の触媒技術により、環境負荷を抑えつつ高収率・高品質な再生油の製造が可能で、ESG 経営やサーキュラーエコノミーにも貢献しています。日本のリサイクル構造の課題解決に向け、ケミカルリサイクルの推進と EPR 制度（製品の廃棄やリサイクルの段階まで生産者が責任を負う考え方）の普及が期待されます。



「ボトル to ボトルからプラ to プラへ」

サントリーホールディングス株式会社

サステナビリティ経営推進本部 部長 平野隆之 氏

使用済みプラスチックの再資源化に向け、ボトル to ボトルの高度なメカニカルリサイクル技術や、植物由来素材による100%バイオペットボトルの開発を推進しています。さらに、PlasTCat®技術により混合プラスチックから直接基礎化学品を生成する革新的な取り組みを展開。焼却依存から脱却し、循環型社会の実現を目指しています。



「パネルディスカッション」

コーディネーター

山梨大学 水素・燃料電池ナノ材料研究センター

特任教授 吉積 潔 氏

山梨大学で水素・燃料電池の研究をされています吉積潔特任教授をコーディネーターに迎え、登壇者による意見交換が行われました。五箇氏もコメンテーターとして登壇いただき、来場者との質疑応答を通じて、GXと生物多様性の融合的アプローチの重要性が改めて認識されました。

参加者からは、講師の方々に対して本日の感想や各分野の課題、自治体に期待する取り組みなど、幅広い質問が寄せられました。それらに対し、講師の皆様からはそれぞれの立場に基づいた具体的なお意見が述べられ、活発な議論が展開されました。

各講師の皆様には、素晴らしいご講演を通じて、それぞれの機関や企業が抱える課題や本音、最先端の技術についてご紹介いただき、大変有意義な時間となりました。心より感謝申し上げます。

